
薔薇の風神

紅碧

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

薔薇の風神

【Nコード】

N 8 2 6 9 Y

【作者名】

紅碧

【あらすじ】

西暦3256年。朝霞蓮、遼の二人はもと夫婦の サイボーグ。アステロイドベルト・ゼロ基地に本部を置く、太陽系連合軍と、地球側の 地球連合軍との戦いの中、鬼と呼ばれる彼らはどちらにも属さない、太陽系秘密機構の、いわば雇われ兵士だった。

西暦3256年 小惑星帯ケレス・ 西暦2011年 地球 初夏

凄まじい風が頬を切つていった瞬間、なにかがゆきすぎていった。
あれは何？

なんだっただろう。

夕暮れが青みがかった空をほのかに紅に染め、藍の闇の滴^{しずく}をにじむ
ように空へ翳^{とき}りを落とす刻。
影が肩越しに背後を風塵のごとく消えて行ったのだ。

「どうかしたのか？」

「影が」

「なに」

少年の脇にいる背の高い男が困惑した表情で腕時計を見た。

「あのコンビニに入ったみたいだな。そいつ」

深めにかぶった帽子をとると男は長めに伸びた前髪をなでつけもう
一度帽子をかぶりなおす。

その瞬間脇にいる同じように深めに帽子をかぶった小柄なジーンズ
姿の少年が目を見開き、硬直する。

「やれやれめんどくさい。うつとうしいんだよね、帽子って」

「心臓止まるかと思った。絶対やめてよね。帽子外でとるの」

「わかってる」

「この時代の人間は角なんてないんだから」

二人はそそくさと。マートと書かれた店に入ると、週刊誌の棚の
前で漫画を立ち読みする少女に近づいた。

背中までストリートに伸ばした琥珀の髪が美しい。少女の年は17
くらい？高校生か？

「ちょっと外に出てください」

ものすごく小声で少年が囁いた。

びっくりして振り返る、少女のあどけない白い頬が薔薇色に染まる。大きな瞳に縁取られた瞳がとてもかわいい。

「いやです」

もつと小声で少女は返事をする。

「あんた、あれはどこへ行った？」

脇にいる190はあるだろうか、スラリと背の高い青年が、やはり小声でだが、今度は凄んで尋ねる。

「あれって？」

少女は読みふけていた漫画雑誌を棚にひょいと置くと

「知りません」とそっぽを向いた。

レジの店員が怪訝な顔でこちらをみている。

「外に出てくれませんか？」

大きな黒目がちの瞳で少女かと思間違うほど、かなり綺麗な少年が深めにかぶった帽子越しにほほ笑んだ。

「僕たちの大事な物、時間を返してほしいんです」

コンビニから5分ほどのところに、二人の住むアパートがある。

2階建ての木造建築で外壁は白塗りにリフォームされているが、築20年とあって、綺麗ではない。1階の端の105号室に二人は少女を案内した。つかまったと観念したのか少女はおとなしく付いては来たが、

「こんなところに連れ込んだりして、警察呼ぶわよ」とかわいい顔で悪態をついた。

「どうぞ、ごかつてに。僕たちも警察ですから」

「警察？まだ子供じゃない。私より下でしょ？このおじさんはともかく、あなたは」

「おじさんとは心外だな。まだ俺は25だ」
脇の長身の青年がむっとして呟く。

「遼、充分おじさんじゃないか。僕は15だけどもきよりもずっと『年上』だよ」

「本当に警察なの？じゃ警察手帳と拳銃みせて。じゃないと信用できない」

「33世紀にそんなもんじゃないよ」

紺の野球帽を右手で少しだけ上げて、少年の方がにこつと笑った。その帽子の中のものを見た瞬間、少女はきゅんと悲鳴をあげそうになるのを必死にこらえた。尋常でないもの。それを見てしまったからだ。

「あなた。鬼？角が2つあるわ。頭に」

「すっかり忘れてしまっているんだね。記憶を。君は時間のエネルギー軸をこわしたまま、未来からこの時代に逃げてきた。僕たちはそれでここまでおいけてきたわけだ」

「誰？あなた」

「太陽系秘密機構の蓮」

につこりとほほ笑んだ、天真爛漫とも言える、その子供っぽい笑顔になんだかごまかされたかのように、少女は彼らに従い、部屋の中へと続いた。

「コーヒー飲む？あとサンドイッチあるよ。食べてね」

さきほどのコンビニで出る間際に購入したサンドイッチ1つとペットボトルのアイスコーヒーをセルリアンブルーのクリスタルカップに1人数分注ぎ、卓袱台に置くと蓮は、もう夕刻時をまわって暗くなったのでカーテンをひき、天井の蛍光灯を付け、正座する少女に尋ねた。

「なんで1人分なの？あなたたちの分は？」

「僕たちはおなかすかないんだ。ね、きみ、桃太郎伝説って覚えてる？」

「童話の桃太郎のことでしょ？知ってるわよ」

「僕が君に聞いているのは、知ってる、じゃなくて、覚えてるか？」

てことだよ」

少し強めに言う蓮に、脇で足を投げ出して座る遼が、あせって小声でささやく。

「おい、蓮、声が大きい。シールド張ってるか？」

「大丈夫。しっかり張ってる。21世紀人には入ってこれない」

「わかった蓮、、あんたにまかせた。コーヒー取ってくるわ。おかわり、飲むよね？」

遼は少女のカップを持ち、帽子を取り、肩まで伸びた長めの艶のある黒髪を振り払い、立ち上がった。ターコイズグリーンのポロシャツ、スリムな黒のジーンズがよく似合う、よく見ると整った顔立ちの青年だ。日焼けした小麦色の肌と鍛え抜かれた体軀、スラリと背が高く、切れ長の一見冷たそうだが、伶俐な双眸が、笑うと爽やかな感じを受ける。

「あなたのお兄さん？それとも叔父さん？あの3cmくらいの角さえなければ、帽子取るとイケメンだったんだ。」

「叔父です」

コーヒーを注ぐ手が震え、こぼしそうになり、青年が怒鳴った。

「パートナーだろ？」

「ごめん。冗談だよ。シールドきいてるといっても、あまり大声ださないでね。で、覚えてる？桃太郎」

「知ってるってことは覚えてるってことと同じなのかな。童話で鬼が島退治に行く話でしょ？あの鬼が島は実は朝鮮半島に住んだ人たちだったとか、沖縄に住んだ人たちだったとかいろいろ伝説があるそうだけど。ところでパートナーって？あなたたち、ホモ？」

「ホモじゃないです。僕は女性です」

「そうだったの？」

「外見は少年の格好してるけど、厳密にいうと、もと人間の女性。今はあっちのもと人間の男のおじさんもそうだけど、二人ともサイボーグです。きみ、結局なにも覚えてないみたいだね。桃太郎のこと。あれはね、鬼が島は、地球の話じゃないんだよ。別の惑星の話」

「別の惑星？」

「小惑星帯って知ってる？アステロイドベルト。火星と地球の間にある」

「うん。図鑑で見たことある」

「あれはね、実は1つの惑星だったんだ。太古になにかの理由でこなごなに砕けてああいいう星屑の海に変わった。鬼が島であるその惑星を破壊したのは地球人。それも太古でおこした出来事なのに、おこなったのは未来人なんだ」

「ちよつと言ってる意味がわからないんですけど」

「きみがしでかしたことなんだよ」

「わたし？」

「きみが時間軸をこわしてここに逃げてきたおかげで、未来と過去境目がつながっちゃったんだよ」

「さつさと思いついてね、お嬢さん」

青年がサンドイッチを指差して、うながした。

「おなかすいたでしょ。それ食べてはやく思い出して。こわした時間軸のあり場所。その空間をファイルにいられて持ってきただろ？どこにあるんだい？そのファイル？教えてくれないか？でないとこの宇宙がなくなってしまうんだよ」

「鬼が島が小惑星の場所にあったもと惑星だってわかったけど、どうして戦争になったの？」

「きいたことはぐらかさないですよ。サイボーグと人間は3280年に戦争するんだけど、そのとき、未来と過去がつながって、アステロイドベルトが惑星になった。それをサイボーグたちが占拠したんだ」

「じゃああなたたちは地球の敵。鬼じゃない！」

「そうだよ」

「人間を攻撃する側に私協力するのいやだな」

「人間は人類の中ではもう少数派だよ、33世紀では。皆と共存できないと、すぐ戦争したがる、そういうエゴな生き物なんだ、彼ら

は。人類みな兄弟なんて大昔言つてたくせに」

「私、知らないわ。そんな未来の話」

少女はそう言い、立ち上がり去りかかり、いきなり、ドウツと後ろに倒れた。

「君！」

蓮が少年とは思えないほどの力で、片腕だけで少女が床に着く寸前に引き止めた。

「おみごと」

遼がかけより、気を失った少女の耳元の真紅のピアスに気づき、蓮に囁いた。

「おいこれは、この子は、、アンドロイドだぞ」

「それでサンドイッチ食べなかったんだ。コーヒーは飲んだけど。今のプレッシャーでショートさせちゃったかな」

「どうやらそうらしいな。おまえやりすぎ。また長官に怒られるなあ」

「人のこと言えないでしょ、遼。影を感じたのは、確かにこの子の意識だったんだけど。驚いたな、エスパーや人間意外にも、テレパスがいたとは」

「俺らサイボーグも、そう（テレパス）だぞ」

「まっそうだけど」

少女は目を閉じ、眠っているかのようにだった。

布団を敷き、その上に横たえると、二人は、となりの奥の部屋へと入って行った。

奥部屋はさきほどの小さな6畳間よりも少し広めの、8畳くらいの寝室で簡易ベッドとモスグリーンのカーテン、同色のカーペットが敷かれてある。

二人は簡易ベッドに腰かけ

「どうする？」と顔を見合わせる。

ショートしたということは、このアンドロイドに「人間」という意

識を植え込み、この時代に逃がした人間たちが、あとを追いかけてくる我々サイボーグを予測して、みつけて、ホシ（容疑者）を追いつめたときに、自然とシヨートするシステムにしていたにちがいない。と、すれば。

「この子、自分が人間で21世紀人だって信じてうたがわなかったんだな。かわいそうなことしたね」

「また未来に持ち帰れば、新しい記憶を埋め込んでもっと幸せに作りなおされる。それだけだ。脳みその、スピアのきかない、俺たちとはちがう」

「どこにあるのか聞き出せなかった。『桃太郎』がキーワードだって、長官からきいたから、一生懸命やってみただけだ。また最初からやりなおしか」

「これで3人目だからなあ。でもおまえもあんまり、むきになるなよ。不条理に殺した人間に恨みを持つ気持ちはわかるが、おまえだって、もと、人間なんだからな」

「、、、わかつてるよ、遼」

西暦3255年。小惑星帯のケレスにあるアステロイドベルト・ゼ口基地太陽系連合軍に勤務する蓮は、それよりも15年前、3240年に反乱を起こした人間側「地球連合軍」の戦いに明け暮れていた。女性である彼女は実戦でなく、基地管制塔で上からの指示通りに仕事をこなす、いわば秘書の仕事に近かった。

その管制塔ごと爆破され、彼女は25歳で身体を失ったのである。蓮は人間でもサイボーグでもなかった。厳密に言うところ人間であるエスパーであり、数は全宇宙でいえばごく少数派に属し、かれらはそのたぐいまれな能力も思うままに発揮できず、両軍にまばらに散ってそれぞれに利用されている。そういう立場の種族だった。

「蓮、はやくおいで」

シャワーをする蓮に、遼が奥から呼んでいる。

「ちよっとまって」

タオルで白い少女の身体を念入りに拭く。傍目にはとうていこれが中身は人工物の身体か？と思えないほど、均整のとれた細身の美しいボディーだった。

サイボーグとはいうものの、31世紀初頭に開発されたヒューマノイドは、見た目も感触も人と同様の皮膚、髪の毛を持つ、まったく区別がつかない、不老不死の完全体で、その数は急激に増加する傾向にあり、33世紀には全太陽系人口の45パーセントを占めていた。人工皮膚と人工の内臓、血管のパーツの無数の組み合わせが、「機械」ではなく、「科学の力で造られた」完璧な人体を創造し、将来は脳以外は人造物の人々が太陽系全体を占めるであろう予測がつくのは目に見えていた。

過去、31世紀に一時期、もと人間の主席が死後サイボーグ化されてからも実務を退かず、その死まで続けられたのもそのような世の動きが影響する。

生前エスパーだった人間はヒューマノイド化しサイボーグ化された後もその能力を持ち続ける者もいたが、人口比率が低く、少数しかない。

他にはアンドロイド、ロボット、実験体の天使族などもいるが、依然として支配する側は、サイボーグと人間。太陽系連合の人類だった。

それが今、崩れようとしている。均衡を保っていた宇宙は2分され、抗争が続いていた。

連は、地球連合軍（人間側）に捕らえられ、サイボーグのセクサロイドとして改造され、太陽系でカタログ販売される寸前に、地球側から見れば反乱分子のリーダーの1人、やはりサイボーグの遼に助け出された。

「間に合った。おまえが傷つく前でよかった。俺が来たからには、もう大丈夫だ」

閉じ込められた建物を空爆後、地球連合軍から盗んできた軍用飛行艇に連をのせ、遼は静かに微笑した。

「お前は俺だけの花でいてくれ」

遼は蓮と同じアステロイドベルトゼロ基地で軍人として空軍で少佐として部署についていたが、蓮が死亡した同じころ、地球連合軍に撃墜されている。

蓮は鏡に映る黒目がちの大きな瞳を見つめた。新しく命を吹き込まれた機械の身体の貌は、生前の自分と同じだが10歳近く若いものだった。

でも、この角はなんだろう。地球連合は捕らえた太陽系連合側の殺した人間を自分側の役に立つサイボーグに改造し、利用する。だが、区別をつけるため、彼らはそれを「鬼」と呼び、2本の角をつけるのだ。太古から人類が忌み嫌うもの。平和を願う、もと人間の二人は、人間に殺され、鬼としてよみがえった。それは人間側「地球連合軍」で生まれ変わった者の証で、最初から、太陽系連合軍で創られたサイボーグともまた違う。「太陽系連合」ではなく「秘密機構」に送られたのはそういう理由だ。こちら側でもまた、区別するために。

「人間の考えることはわからない。15だなんて。犯罪じゃない。あんなとこに売ろうなんて」

私たちは2人しかない。それがすべてだ。だが、それだけでいいかけがえのないもの。それが蓮にとって遼なのだ。

言葉に出しはしないが、彼女はとても遼を愛していたので、鏡の中の不安な心を消し、にっこりと微笑すると、奥の部屋へと向かった。

「ホシを壊したんだってね」

金髪の美しい髪を肩までまっすぐに降ろし、黒の偏光グラスをかけた、黒のスーツ姿の青年が、画面に映し出されていた。最初に反乱を起こした「地球連合」（地球の人間）の敵側、「太陽系連合」（サイボーグ）のリーダーとも言える、レオンハルト長官である。

「ショートしています、もうしわけございません、長官」

「あの伝説がキーワードになってるとわかってはいるのですが、ど

うしてもやりかたがわからず、うまくいきません、」

「きみたたちが、もと、夫婦だって知ってたから、私はきみたちをペアにした」

レオンハルトはサングラスをとり、琥珀色のやさしい瞳で、覗きこむように微笑した。

「なんならペアを解消してもいいんだよ、朝霞遼少佐」

「それだけは、お許しください。長官」

「時間があまりないんだよ。空間の破壊された歪から、破壊が始まっている。この時代から太古の小惑星帯に移動するサイボーグや人間たちもいて、私はそれを阻止してはいるのだがどうにもならない。時間軸を早く修正しないと、ねじれたエネルギーでこの宇宙全体がどうなるかわからない。大変な状態なんだ」

「小惑星帯のもと惑星は我々サイボーグの基地を造られたのでは？」

「あの基地は『地球連合軍』に破壊された。移住は取りやめにした。ゆがんだ空間に造ることが不可能だったのだ。初めに移住したサイボーグたちは追ってきた人間たちと共に空間の歪にはさまれ、破壊し消滅してしまった」

「どれくらいいただけですか？」

「ん？」

「我々、『鬼』はあなたに拾われた言わば雇われ兵士です。危険を冒すのならばそれ相応の見返りをいただかなければ、これ以上は引き受けられません」

「上乘せ料か？」

「そうです」

「10万銀河ドルでどうだ？」

「、、、、15万で」

「、、、、わかった。良い結果を待っている。朝霞遼少佐」

苦渋の表情のレオンハルト長官に遼は敬礼した。

「必ずや朗報をお届けにあがります。」

生温かい湿った風が頬をなぞっていく。いわれのない悪意を感じる時、蓮は、なぜかとてもかなしくなる。紫陽花の花群の向こう側に広がる、ぬけるような青空の片隅に雷雲をみつけ、蓮は手をつなぐ遼を見上げた。

「来るよ」

「そうか」

「こんどのはアンドロイドじゃない。人間だ」

地面の亀裂がまっすぐに、こちらにむかってくる。それはまるで獲物をみつける獣のように二人に向かって迫ってきた。

「向かうところ敵なし」

遼が微笑した。目は笑っていない。口元だけをわずかにゆがめている。切れ長のとてもきれいな遼の双眸は、緑色に煌めいていた。遼は凍りつくような魔性の笑みを浮かべ、低く言い放った。

「なぜ俺たちを追う？こわれた時間軸を戻しにきたのか？それとも俺に殺されたいか？鬼の俺たちに」

風が空気を切り裂いていく。地面から地響きを立て、いきなりあらわれたものを見た二人は目を見開いた。

真紅の宇宙船？

緋色の飛行艇は二人の頭上を轟音とともにすれすれに通り過ぎ再びむかってくる。

「俺たちをなぎ倒すつもりだ。蓮、伏せろ」

蓮は感情のなくもりのない瞳を船にむけた。その長い睫にふちどられた可憐な目は大きく見開かれ、肩に降りかかる漆黒の髪は風塵になびいた。瞳の奥がセルリアンブルーに煌めく。

瞬間――！

辺りの空間を稲妻が走り、宇宙船が爆破される。空中を真紅の薔薇の花が散った。

「蓮――」

表向きはブルー系のジーンズにＴシャツ姿の少女は頭を押さえ、その場に崩れ落ちる寸前、遼に抱えられた。

「大丈夫か？」

抱きしめられた逞しい胸の中で、縋りつく蓮は「影を破壊してくれてありがとう、遼。後ろに気をつけて」と囁いた。

背後に1人の人影が近づく。遼は黒い人影に、気づくと、低く一喝した。

「小惑星帯ケレスについてお前の覚えている記憶を述べよ」

「それは答えられない。私は君たち、鬼を消すために私は来た」

「人間が何を言う。鬼の俺たちに」

遼はヘルメットを取り去った人物の貌を見て愕然とした。

それはもう一人の自分、過去の人間であるときの自分に瓜二つだったからだ。

「私は君のクローンだ。朝霞遼少佐」

そついうと青年はにやりと笑った。

「自分を殺せるかな？ きみは」

レオンは失われた遠い記憶を辿っていた、、。

「どうしたの？、レオン」

プラチナグレーのスーツ、薔薇色の長い髪を後ろで束ねた妻で、秘書のルビーが紅い瞳で尋ねた。とても美しい娘だ。

いつとき時間をおいてから、休息時は私服であるワインレッドのスーツ姿で、金髪に琥珀の瞳の美青年は艶然と微笑んだ。

「、、、少し考え事をしていた。心配ないよ、ルビー」

玲瓏な青年は微笑し傍らの少女に屈んでキスをした。

惑星ケレス中央司令室の灯りは今、暗かった。

未来の運命は誰にもわからない。

頭上のドーム外に広がる無数の星たちの煌めきが美しく、そしてひっそりと沈黙していた。

「この子は私の希望」

生まれたばかりの黒髪の翡翠色した目の男児を抱いて、エメラルド

グリーンの大きな瞳で光に透ける銀の髪ひとの女は言った

「レオン、どんなときでも、希望を捨てないで。最後の可能性がなくなるまでは、あきらめることをしないで。願っているから、いつも」

天使族は天使族同士なら問題ないが、人間との間に子を生せば、その命を引き換えとする。そうプログラムされて造られた実験体だった。創造主レッド・アーク博士とその実子シルバー、アレン・ハイバー博士の実子ラメールだけが知りうる秘密だった。二人は天使族と人間の混血児だったが、子を成すという点では例外だったのだ。母体も新生児も無事だった。

たったひとつの可能性にかけ、最愛の人の子を産み、幸せだと彼女は微笑した。出産後間もなく駆けつけた夫ハイト氏は、普段ボーカ―フェイスの彼に似合わず、満面の笑みを浮かべ、ありがとうと妻と子を抱きしめた。シルバー25歳。ブラック・ハイト40歳。幸せそうな彼らをレオンはじっと見守っていた。

―蓮、お前が激昂した時に瞳の奥に見える色、淡い青碧は、海のいろに似ている―

1000年過去に地球の海を人類は失った。

「こんなにきれいないろだったのか」

はまなすの紅い花咲く砂浜を、過ぎた頃、二人は目の前に広がる大海原をそう感じるのだった。

私たちは死んでから再び甦って再び巡り合った。お互いがお互いではない。ただそれだけなのに。

なぜ、人間は追い詰めるのか。

―蓮、お前の目の中に海が見える。人類が昔、失ったと言われる海が―

「なぜ、僕たちはクローンではなくサイボーグ（ヒューマノイド）として蘇らされたのかな？人間に」

「脳のみ人間の、サイボーグ（ヒューマノイド）は自分の過去の記憶が残っているが、クローンは残っていない、まったく別の人間だからな。すぐに使いこなせないし、生身の兵士はエスパー以外、役にたたんからだろう」

「別人間に生まれ変わるよりは、あなたの記憶が残る『鬼』（地球連邦軍に殺され蘇らされたサイボーグ）になってよかった」
蓮は髪の中の二本の角を指差した。

「それは俺だって同じだよ、蓮」

爽やかな海風に吹かれ、そう呟いた蓮に、遼が白い歯を見せ、笑った。

シールドをはってあるから、他の、この21世紀時代人には見えな
いし、聞こえない。二人だけの空間がそこにはあった。

「もう、未来に帰りたくない。このまま二人でこの時代で生きていきたい」

「そうだな。この世の終わりが来てもお前一人がいればいいよ。そう
なったら、幸せだったって二人で笑って死のうな」

遼がいれば他には何もいらないと一瞬思う。遼がいなければ、生
きている意味はない、とも。

「そろそろ鬼が島に帰るか」

「ええっ？ やっぱりそうなの？」

「敵を倒した『手間』を忘れたのか？ あんなに俺が苦勞したのに。
それに俺はまだ命が惜しいし、おまえとの人生をもっと楽しみたい。
まだ可能性があるうちは、絶対にあきらめたくはないんだ。それに」
「それに？」

「まだ俺たちは報酬を受け取っていない」

遼はにっこり笑うと、手の中に持った、さきほど敵からまんまとせ
しめた時間軸の修正軌を見せ、腕時計の中に収束させた。

了

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8269y/>

薔薇の風神

2011年11月24日18時52分発行